

藤本徳明先生のこと

安 森 敏 隆

梅光女学院大学の昼時の六角堂は何時にもぎわっていた。山路平四郎先生、磯田光一先生、今井源衛先生、国分直一先生といった超一流の先生方が、佐藤泰正学長を交えて、何時も談笑しながらコーヒーを飲んでおられた。そんななかに時おり、『平仲物語』『源氏物語』や『宇津保物語』の専門家が目方誠先生の奥様の目方さくを先生の姿もみえた。

藤本徳明先生の名前を、強烈に教えてくださったのは、目方さくを先生である。ちようと、私が、文学部長をしているとき、目方さくを先生には大学院の先生としてきていただいていた。あのころは、まだ近代文学の先生がたのことしか、あまり頭になかった頃である。当時、問題を投げかけていた梅原猛の『水底の歌』や遠藤周作の『スキヤンダル』が話題になったり、司

馬遼太郎や吉本隆明や井上ひさしに昨日、神田の古本屋街で会ってきたという具合に、いつもリアル・タイムで話が展開し、色々の話が聞けてとても楽しかった。

そんななかで、目方さくを先生の自慢は、ときおり「藤本徳明先生」のことを、そうした話題のなかに出されることであった。最後は決まって、わざわざ金沢から、福岡女子大学に来て貰ったことの自慢であった。福岡女子大学きつての人氣教授で、卒論の指導は、何時も先生の説話研究に学生たちが集中していたことを何度も話されていたのが印象的である。私は、いつかこの話題の先生にあつてみたいと思ったことだった。

その後まもなく、先生の著書『日本のロマン―伝承・文学にたどる北陸史』（中日新聞本社 昭和51年7月）を手にいれ

ることが出来た。これは先生が金沢美術工芸大学在職中に日本海沿岸を舞台に活躍した大伴家持、木曾義仲、世阿弥などの文学・歴史上の人物を『万葉集』『平家物語』などの古典によりながら、現代の「眼」を通して再認識されたもので、第四回「泉鏡花記念金沢市民文学賞」(「北陸の風土と文学」笠間書院)を得られたものである。この後付けの著者の写真は、なんとも凛々しく、若き日の木曾義仲の若武者ぶりを彷彿とさせるものがあった。

先生の専門は、最初、『沙石集』を中心としたものであった。そして、『宇治拾遺物語』の先覚者として説話文学の中心の研究者になられ、同志社女子大学においてになったのである。その後まもなく、私も先生と同じ大学に赴任し御世話になることになったのである。

同志社女子大学に來られてからの先生の活躍は、なんとも大変なものであった。

私が赴任する前年の、昭和六十二年四月に、同志社女子大学短期大学の「日本語日本文学科」に來られ、平成元年に創設された同志社女子大学「日本語日本文学科」の創設のために中暗先生と共に奔走された。受験当日は、天皇の本葬とかさなっ

たにもかかわらず三十倍を越す競争率になり、先生の安堵された顔が思い出される。その後、「日本語日本文学科」の学科主任を四年されて、盤石の基礎を作っていた。これは、福岡女子大学時代の活躍と実践が在ったのである。

続いて、平成九年には、大学の上に「大学院修士課程」をつくっていただき、さらに、平成十二年には大学院「博士後期課程」を創設することができたのである。

そうした学内における縦横の動きのなかで、先生の読書の広さ、深さ、教養の広さには、何時も圧倒されたものである。芥川龍之介、夏目漱石はもちろん、五木寛之に至っては、交友もあられ、署名本も何冊か見せていただいた。先生の読書の幅は、専門書はもちろん、マンガ、週刊誌に至るまで何時も目を通していているのには、驚かされた。スポーツ関係についてもあまり関心がないように装われながらも、相撲や、野球については大変造詣が深く、私のフアンの広島カープの話をして、なかなかのものであり、先生の教養の深さと広さには、いつも圧倒されてきたものである。今後とも、先生にはいつばい教えていただきたいことがあり、学校にも時々来ていただきたいと思っている。